「古典文学Ⅰ（神話と伝説）」遠隔授業の実践記録

Practice Research of “Classical Literature Ⅰ”Distance Learning

野 々 村 安 浩

（地域文化学科）

キーワード：遠隔授業、

1. はじめに

令和２年度秋学期の授業について、新型コロナウィルス感染拡大防止のために遠隔授業で実施する旨の連絡を、島根県立大学松江キャンパス教務学生課より令和２年８月６日付書類にて受けた。また、その授業方法についてもいくつかの提案を担当課から連絡があった。そのなかで、筆者は情報機器の発信環境から島根県立大学松江キャンパスに備え付けの PC を通し、大学で使用する情報発信ソフト等によって、担当する授業時間帯に大学内の講義室を使用してリアルに受講生への発信の方式によって講義を進めた。従来の対面により行われていた大学の授業形態とは異なり、講義室に受講生の姿がない形であった。授業を進めていくなかで、対面式授業とは異なる感想などを持ったので、数値面を中心にその点についてレポートしてみたい。

2. 遠隔授業の実施方法

この授業に使用するテキストは、倉野憲司校注『古事記』（岩波文庫）で、受講生に購入を求めた。そのテキストの使用は全 15 回の授業の内、第９回まで使った（後掲　「別記１　授業計画案」参照）。また、全授業に使用する紙資料（レジュメ）については、各授業日の数日前までには、古典文学研究室にて配付し、さらに同資料を PDF にて大学使用の teams の「古典文学Ⅰ（神話と伝説）」授業のページに掲載した。それらを踏まえて当日の授業を展開した。授業ではパワーポイント画面にて関係資料（写真・画像・図表）も加えて進めた。当日出席できない受講生のために授業録画も行った。

受講生は、授業時間内では、自分の画像・音声はオフ状態にして聴講する形をとっていた。対面授業でも実施されているが、受講生に授業中に作業を課すためにレジュメには記入箇所を設けて、授業者からの一方向の授業形式にならないような点も考慮した。そして、授業終了時には、「課題」として講義内容についての「感想」「質問」などを teams のなかの「Forms」に記入し（字数の制限なし）、授業日（金曜日第４限）の翌週月曜日午後５時までに提出を求め

た。この授業の登録受講生は 48 名であった。

なお、授業内容に関わる 3 テーマ（後掲「別記 2　期末レポートのテーマ」）のうちから、期末レポート（複合的なテーマも可）の提出を課し、毎回の「課題」提出と合わせて評価を行った。

3. 受講生の受講への対応

受講生がどこで受講しているか。それについて、第 7 回授業の課題提出に際して、次の選択の形でアンケートを実施した。その結果は〔　〕内の数値であった（回答数　42 名）。

ア）自宅（寮・下宿含む）〔38〕　イ）大学構内　〔4〕ウ）その他〔0〕

次に、受講生の全 15 回の授業への（ア）出席状況と（イ）課題提出状況をみていく（表 1）。

（表 1）

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
ア	48	48	48	47	48	48	47	46	46	45	48	48	42	46	45
イ	42	48	48	44	41	46	42	39	41	41	44	40	32	44	43

また、第 10 回以降には授業への出席状況がやや下がるが、下記の表 2（第 6 回以降を掲示）のように、その受講生は授業内容に即した課題を提出している。つまり、その受講生は録画授業を聴講したことが考えられる。

（表 2）

授業回数	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
提出人数	0	1	0	2	2	0	0	4	2	1

4. 受講生からの課題提出

大学で用意してある「出席カード」（タテ 9．5ｃｍ×ヨコ 9．5cm）には 5 行程度の、授業への質問等を記入する余白がある。そのカードを利用した授業への出欠および質問が記されていることを過年度開催の授業では見学した（令和元年 11 月 5 日　山村桃子准教授「古典文学Ⅰ（神話と伝説）」）。

そのカードの余白では概ね 100 字程度を記入だけで、「出席カード」という性格上、授業終了時に提出が求められるため、複数の質問事項を記すことはできないように考えられた。

今年の遠隔授業については、前述のように授業後に「課題」として、Teams の Forms に授業の「感想」「質問」などの記入を求めた。記入字数の制限は設けず、提出の締切日は授業後 3 日間を取っていた。

提出については、授業直後や締切時刻直前などさまざまであった。字数については概ね 100 字から 200 字程度が大半であったが、なかには 1，000 字超える受講生も毎回複数いた。

記入内容については、当該授業の説明不足の指摘や誤解、また授業内容に関連する質問が多くあった（後掲　「別記 3」質問内容（抜粋）」）。それらの点については、次の授業の冒頭で補足していった。

5. おわりに―遠隔授業を実施した感想―

担当の授業では新型コロナウィルス禍のなかで対面授業が出来ず、上記の形で遠隔授業を実施した。授業担当者にとって機器操作への対応のうえ、受講生の顔が見えず、まるでテレビカメラ前のアナウンサーか、You-tuber であるかのような感覚で、授業当初には戸惑いがあった。しかし、パワーポイトを活用し、「映像作家」的な授業資料作成など、従来型の授業と異なる教材研究や授業方法への見直しが求められた。また受講生からの長文の「課題」への記述内容によって、毎回授業の内容・方法への微調整を行うことが出来た。

なお、この授業内容に関連する展覧会が、島根県立古代出雲歴史博物館で企画展として「編纂 1300 年日本書紀と出雲」（令和 2 年 10 月 9 日～12 月 6 日）として開催されていた。そのため、その展覧会の展示作品に関した説明も加えたり、また受講生の中にはその展覧会を見学し、その感想等も「課題 Forms」に記していた。

最後に、本人の許可を得て、受講生のひとりの感想コメントを記しておく。

> 「オンライン授業であるため、自分で疑問に思ったことを気軽に聞くことが出来てよかった。」（受講生：N）

謝　辞：

「古典文学Ⅰ（神話と伝説）」の遠隔授業の実施にあたり、島根県立大学松江キャンパス地域文化学科の山村桃子准教授には多くのご教示･ご援助をいただいた。記して謝意を申し上げる。

〔別記 1〕「古典文学Ⅰ（神話と伝説）」授業計画案

1. 古事記・日本書紀の成立
2. 天地初発と国生み　―神名の意義

3. 黄泉国訪問―『古事記』の世界観
4. 須佐之男と天照大神　―黄泉国訪問（補遺）―
5. 八岐大蛇退治　―自然から文化への主題―
6. 八岐大蛇退治譚の変奏―中世神話―
7. 大国主神の成長　―オホオナムジから大国主神へ―
8. 大国主神の「国譲り」―葦原中国の平定―
9. 海神の宮訪問―天孫降臨と日向神話―
10.『出雲国風土記』の国引き神話
11. 伝説とは何か―『古事記』の神話から伝説へ―
12. 地名と伝説―「風土記」地名伝承―
13. 歌人の伝説―柿本人麻呂と小野篁―
14. 天皇の伝説―安徳天皇・後鳥羽上皇―
15. 松江の伝説―武蔵坊弁慶・源助地蔵・嫁ケ島―

〔別記 2〕期末レポートのテーマ

1. 講義で取り上げた、神話、伝説の内容から、テーマを選び、それをさらに深く自分なりに考察する
2. 神話、伝説の内容が地域においてどのように変容し、地域づくりに活用されているかを考察する。
3. 自分の出身地に関わる神話・伝説について、その背景やその地域におけるとらえられ方を考察する。

〔別記 3〕　受講生からの質問内容（抜粋）

1.『日本書紀』の編纂資料に個人の日記がなっているわけはなぜか。
（現在の個人の感想を主に記す日記のイメージからの質問か）
2.『古事記』『日本書紀』の同一神の神名の違いは何か。
3.「神が死ぬ」について、当時の人の死生観はどうなっているのか。
4. スサノヲの溝を埋める行為はどのように困ることか。
5. 殺されたオホゲツヒメから五穀が生み出されるのはどういう意味を持つのか。生み出される部位とその物には関係があるのか。
6. 国譲りの場にアメノホヒが登場した理由は何か。
7.「出雲国風土記」の国引き神話に新羅が見えるのは、政治的背景があるのか。
8. 明治時代初めに、陵墓が不明な天皇の存在が対外的に不都合な理由は何か。